



日本免疫学会 理事長

斉藤 隆

理化学研究所 免疫・アレルギー科学総合研究センター

理事長就任にあたって

この度、菅村和夫理事長の後任として、2012-14年の2年間の任期で第18代日本免疫学会理事長に就任することになりました。大変光栄に存じますと同時に、責務の重要性に身が引き締まる思いです。

現在、日本免疫学会は、1971年の創立から40年余を経て、5,000名を越す会員を有し、100周年を迎える米国免疫学会に次ぐ世界2位の会員数を誇る、世界の免疫学をリードする学会として発展しました。免疫学は、これまで生物学領域で常に先導的な役割を果たし、数々のエポックメイキングな発見の下に発展してきました。昨年の自然免疫に対するノーベル医学賞の授与に象徴されるように、免疫学は、生命科学の根幹の研究が生体防御・疾患への橋渡しに繋がる重要な分野であり、生命科学の研究成果が国民の健康や医療に貢献することが強く要求されている今日、特に疾患克服を目指した免疫システムによる制御への発展が期待されています。とりわけ、アレルギーや自己免疫および感染症など免疫疾患の増大や高齢化社会などの社会的変化の中で、免疫疾患の克服が免疫学への大きな社会的要請であり、それはまた発展してきた免疫学の21世紀の課題に他なりません。疾患の解明と克服の為に、生体のダイナミックな制御システムを解明する統合的科学としての免疫学を発展させ、基礎・応用・臨床を問わず、新たなブレークスルーとしての研究成果や応用技術が望まれます。それらの発展のために、活力ある独創的な研究を担う若い人材育成と、そのための研究環境の整備、の両者が必要であり、日本免疫学会として、積極的にこうした課題にも努力したいと考えています。

こうして目覚ましく発展してきた日本免疫学会ではありますが、この数年は学会会員数や学術集会の演題数も漸減しており、特に若い研究者・学生の参加の減少は、今後の免疫学と学会の発展への懸念です。研究環境が厳しくなる中、将来への不安、研究費の獲得、重複する学会・集会、などの理由に基づくと思われるのですが、日本免疫学会の発展のために、これらに対する対策が急務となっています。

安定した研究環境と研究経費・ポジションを確保して、活力

のある若い研究者を育成維持するために必要な、科学行政のあり方への積極的な取り組み、研究環境の改善にも取り組みたいと思います。学会としては、より魅力ある、参加しやすく、発表したい学術集会の創出—医学系に留まらない幅広い分野から、免疫を取り巻く関連・応用分野から、また関連する臨床系学会との連携を進めて臨床分野からも、多様な会員が参加し交流発表できる学会を創出します。学生会員の会費・参加費の大幅減額とともに、日本語での発表、魅力ある学会会場、等の検討を進めます。これらと平行して、一昨年、神戸で開催され大成功に終わった国際免疫学会を経て、更に世界をリードする、国際的なレベルの内容の学会に発展させ、諸外国の学会との積極的な交流による国際化、アジアの拠点としての活動を更に進めます。一方、2005年度のNPO法人化を機に、免疫学会は社会貢献活動にも積極的に取り組んで来ていますが、大好評の「免疫ふしぎ未来」をはじめとして、一般社会に対して、より広く免疫学の魅力と重要性をアピールする活動も広げ、免疫研究への一層の理解と、啓蒙に努めてゆく所存です。

これまで築き上げられてきた輝かしい日本免疫学会の伝統と成果を継承し、本学会の使命としての「会員相互の連携を強め、オープンで活力ある日本免疫学会をより発展させ、もって免疫学の新たな発展を促進する」ために微力ながら全力で努力する所存です。これまで、初代のあり方検討委員会、教育推進委員会および学術委員会の各委員長として、免疫学会の発展と改革に取り組んできた経験を活かし、より一層の学会の発展に努力したいと思います。つきましては、本学会の活動・運営に関しまして、会員皆様からの、忌憚のないご意見・ご提案をいただけますよう、またご協力とご支援をお願い申し上げます。

なお、私の就任に伴い、総務委員会委員長として三宅健介先生(東大・医科研)、財務委員会委員長は石井直人先生(東北大)、諮問委員会としてのあり方検討委員会委員長は瀧伸介先生(信州大)にお願いし、これら諸課題に共に取り組んで参ります。